

【評価・価値付け・方向付け】



学びの自覚を図る評価の在り方

～評価の目的と自己評価と相互評価～

昭和小学校 田中 祐子

1 授業改善の視点

- #### ・自己評価と相互評価の在り方

2 具体的な実践

(1) 評価とは

評価とは、通知票に表記するためだけものでない。評価とは児童理解であり、児童がどんな学習状況であるのかを見取ることである。

＜教師にとっての評価＞

- * 子ども一人一人への指導・援助方法の改善や補足。
 - * 教師自身の活動や指導・援助の見直し。その子へのかかわりを計画・再考

＜子どもにとっての評価＞

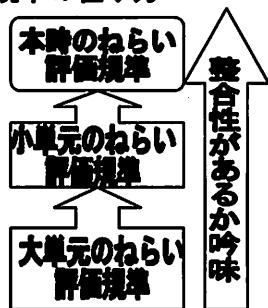
- * 自分の学習状況に気付き、自分を見つめ直すきっかけ。
 - * その後の学習や発達を促す。

活動の結果や見栄えを評価するのではなく、活動過程における良さやがんばりに目を向ける立場で、その子なりの活動や変容をきめ細かく分析し、具体的な視点から評価することが大切である。

(2) 評価の観点と評価規準の在り方

評価の観点は各教科
によって異なる。どの
項目も評価をする必要
はあるが、全てを評価
しきれない。そこで、
単位時間のねらいと同
じように評価の観点の重点化も必要となる。本
時のねらいが「知識・理解」なら、評価の観点
の重点も「知識・理解」となる。

また、評価規準もきちんと設定し、ねらいと評価規準に整合性があるか検討する必要がある。評価規準は「何がどの様にできたらOKなのか」具体的にすることが大切である。担任や



担当教員以外の人も評価できるような具体性が大切である。

(3) 教師による評価方法

評価は常に行うものである。導入・展開・終末と子どもの活動や学びが停滞しないように評価し、指導・援助を行う。ただ、一単位時間のねらいに到達できたかどうかを評価する時は展開の終盤か終末で行うことが多い。その時の評価方法の例を下記の通りである。

＜教師が行う評価の方法＞

- ・行動観察（しぐさ、つぶやき）
 - ・発言、会話分析
 - ・活動、作品分析
 - ・ノートの記述
 - ・評価問題の正誤

(4) 児童による評価方法

児童が行う評価も、教師が行う評価の観点と同様に重点化を図る必要がある。重点化を図ることによって、子どもたち自身も、本時でどんなことが出きればよかったですのかを自覚することができる。

①自己評価

自己評価は一単位時間の終末で行うことが多い。この一時間で自分はどの様な学びを獲得することができたのかを確認するために行う。

自己評価にも教科によって様々な方法がある。その例をいくつか挙げてみる。

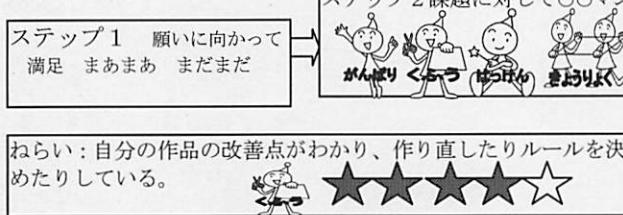
〈生活科の場合〉

あらかじめ、導入の時に本時どんな姿になればよいのかを明示する。終末では、自己評価の規準を教師から提示する。こうすることで、より自己評価の精度をあげることができる。

また、ねらいの重点化を図るために、「今日は工夫マンになれるといいね。」と導入で話し、終末は「もっと楽しくなる方法を友達と比べて

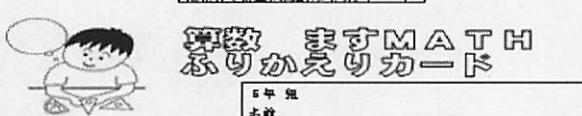
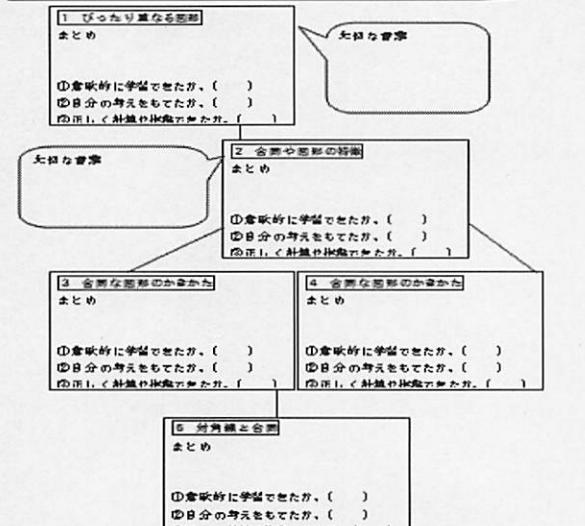
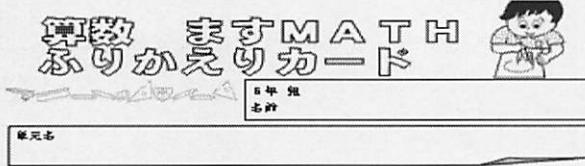
考えて、やってみた人は☆5つです。」と、規準を明らかにして、☆の数で評価をさせる。

このように達成度を数値等で示すのも効果的である。



＜算数科の場合＞

単元によって、自己評価や自己評価カードを変えていくことは子どもたちの学びを高めていくために大切である。本時における身に付けていきたい力がついているのかを確かめることを重点においていた評価カード。また、学び方を身につけさせるためのカード。それぞれ、単元ごとに重点をおいて取り組ませるもの有効である。



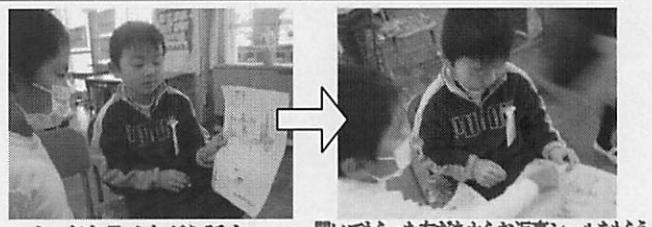
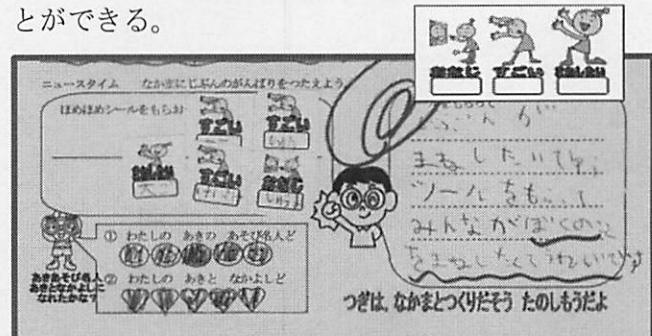
学習内容		①基礎的に学習に取り組めたが	②自分の考えをノートに書きこむことができたが、	③考え方を出すことができたが、	④正しく立式や計算ができるか、	⑤自分の伸びりや特徴の学びのよさ
1	平行四辺形の面積を調べよう。					
2	平行四辺形の面積を計算で求めよう					
3	高さを見つけて面積を求めよう。					
4	平行四辺形の底辺の高さと面積の関係					

②相互評価

相互評価のいろいろなやり方がある。教科の特質に応じて、子どもたちに「どこまで何ができるたら○なのか。何ができていなかつたら△なのか。」を明示してから行うことが大切である。

＜生活科の場合＞

「お返事シール」を活用し、仲間からの賞賛を通して相互評価を行う。活動終了後に、シールで価値付ける活動である。シールを貼るという行為で、シールを貼る側は仲間を評価し、貼られる側は仲間からの賞賛をうけることができる。これにより、自分の活動や気付きがよりよいものであったのかを客観的に評価することができる。



カードを見せながら話す

聞いてもらった友だちからお返事シールをもらう

＜国語科 音読会の場合＞

評価の観点や規準を示す。音読の発表が終わったら、一斉に「いいねえ。」などの札をあげる。「項目4つができていたら、札を高く上げる。(大きな声で)」「3つだった中間にあげる」など、札の出し方を指示する。これなら、発表者も評価する側も楽しくなり、発表してよかつたという満足感を得ることができる。



国語「書くこと領域」における評価の在り方

～2年生「おもちゃの作り方」を通して～

池田小学校 石田 利永子

1 授業改善の視点

- 児童が自己充実感をもつことができ
る評価の在り方

2 具体的な実践

本単元では、児童が書くことへの目的意識と必然性をもたせるため、生活科「うごくうごくわたしのおもちゃ」とも関連させて、「1年生のペアの子へプレゼントするぴょんぴょんウサギの作り方を書こう」という言語活動を設定した。そして、児童一人一人に、順序を整理し、簡単な構成を考えて、よりよい文章を書くための力を付けるために、授業の終末に、自己評価（自分チェック）と相互評価（仲間チェック）の2段階の評価方法を取り入れた。

(1) 自分チェック

①自分が書いた文章を声に出して読む

自分チェックでは、まず、自分が書いた文章を声に出して読むことを大切にした。これは、主語・述語の関係や文と文とのつながり、「は」「を」「へ」などの正しい表記ができるかを、自分の目だけでなく声に出すことで、一文一文確かめながら間違いに気付き、正す力を持つためである。



[自分の書いた文章を指しながら読む児童]



[書いた文章を声に出して一斉に読む児童]

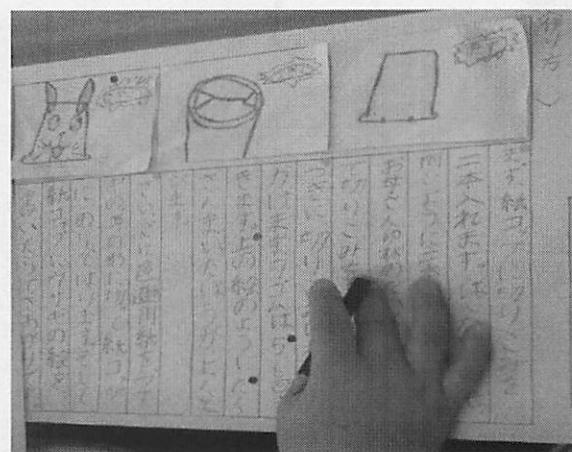
②シールを貼る

1年生の子が、2年生の児童の書いた文章を読んで実際に自分でおもちゃを作ることができるために、本時学習した説明書のこつを取り入れて書けているかをワークシートにそれぞれ色分けしてシールを貼る活動を取り入れた。

本時でのこつは、以下の3点である。

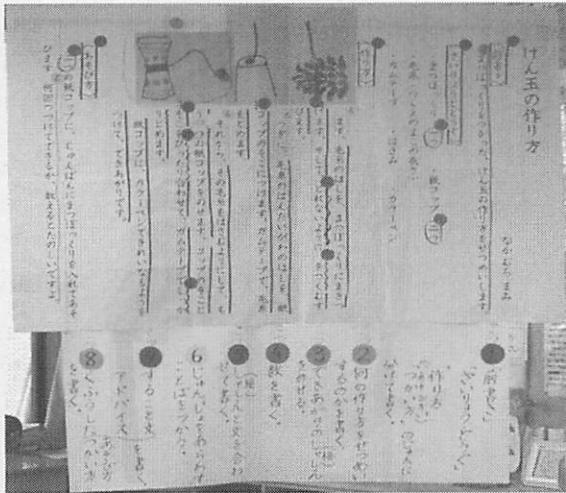
- こつ⑤…絵と文を対応させて書く
- こつ⑥…順序を表す言葉を使って書く
- こつ⑦…作業を説明する文と、作り方のアドバイスの文を書く

この3つを、自分が書いた文章のどこに取り入れて書けているかを、確認させた。



[自分チェックをしたワークシート]

だが、自分が書いたどの文章が、説明書のこつ何番に当たるのかが分かりにくい児童のために、前時までに学習した「けん玉の作り方」の文章を掲示して、どの文章がこつ何番で、何色のシールを貼ればよいのか自分でチェックしやすいようにした。

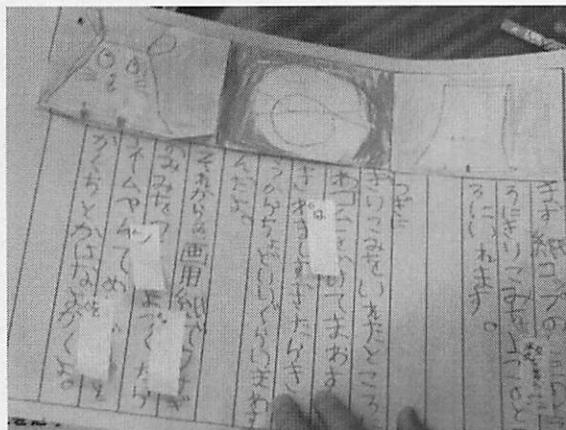


[自分チェックの仕方の掲示]

(2) 仲間チェック

仲間チェックでは、自分では気付かなかつた表記の間違いに対して、仲間から付箋を使って教え合う活動を取り入れた。

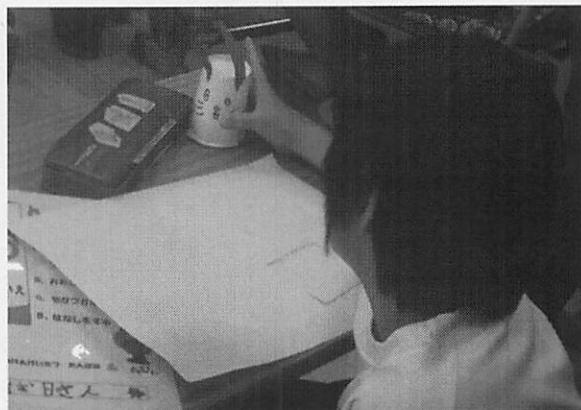
また、仲間から自分の書いた文章のよさを付箋に書いてもらうことで、達成感や自己充実感を味わうこともできた。



[表記の間違いをアドバイスするワークシート]



[互いの文を読み、仲間チェックをする児童]



[仲間からの感想を読む児童]

3 実践を振り返って考えられること

(1) 書くことへの目的意識と必然性をもたせた言語活動を設定したことにより、授業の終末に自分チェックをする活動をする際には、「1年生の子が読んでも作り方が分かりやすい文章を書きたい」、「自分の文章をよりよいものにしたい」と児童の意欲を最後まで持続することができ、書く力を高めることに繋がった。

(2) シールを貼ることにより、視覚的にも自分の書いた文章がこつを取り入れて工夫して書いているかがよく分かった。書く力を確実に付けることができたことを、児童も教師も実感できた。

(3) 仲間から自分の書いた文章のよさを認めてもらうことで、一人一人に自己充実感をもたせることができた。

外国語活動の評価における授業改善

～ねらいと評価に一貫性をもたせた指導の在り方について～

笠原小学校 外国語活動 籠橋 亮介

1 授業改善の視点

- ・自己の振り返りと教師による価値付けの在り方

2 具体的な実践

(1) 中間交流での教師による価値付け

外国語活動では、交流を前・後半の2つに分けることが多い。その前半と後半の間に中間交流の場を位置付け、後半交流の質を高める。中間交流の意味は大きく2点ある。

- ・前半の活動でねらいにせまる児童の姿を取り上げる。
- ・前半の活動で困っている児童の姿を取り上げる。

本時のねらいとして、大切にしたいポイントに関わる姿を取り上げ、全体に広げることで、後半の活動の質が大きく高まる。

(2) 終末での自己による価値付け

本校外国語活動の終末の場では、児童が本時の自分の姿を適切に振り返ることができるよう『コメントカード』に記入する時間を確保している。振り返る観点として、次のようなものがある。

- ・“Today’s Aim”は達成できましたか。
- ・(本時扱った言語材料)を使って相手に伝える(質問する)ことができましたか。

【慣れ親しみ】

- ・相手の言ったことを繰り返して確認しながら聞くことができましたか。【態度】
- ・今日の活動で初めて知ったことや気付いたことはありますか。(記述式)【理解】

これらの観点で自己を振り返り、活動の達成度を実感することで、外国語活動に対する自信をもつことや次時への意欲につながると考える。

また、記述した気付きについては、英語運用に関することと言語や文化に対する気付きの2種類に分け、意図的な指名をして語らせることをしている。

(3) 終末での教師による価値付け

終末には、前記の児童自己による振り返りだけではなく、教師からの価値付けの場も位置付けている。

本校では、毎時間、ALTが参加しているため、HRTとALTの2者による価値付けを行っている。2者で活動を見る視点を効果的に分担し、コメントに反映させている。

ALT…英語運用に関してのよさの価値付け

【慣れ親しみ】

- (例)「相手への質問がとてもすらすらと言えたね。何と聞いているのかよく分かったよ。」「“strawberry”的発音が英語らしく発音できていたね。聞き取りやすかったよ。」

HRT…コミュニケーション態度に関してのよさを価値付け

【態度】

- (例)「○○さんは相手の言ったことを繰り返していたね。伝わっていることが分かって、安心して話すことができたと思うよ。」

また、上記以外にも、コミュニケーションをしたからこそ分かった事実(○○くんの将来の夢、△△さんの好きな物等)を広め、コミュニケーションすることのよさに触れることも大切にしている。

3 実践を振り返って考えられること

単位時間の中で、児童の姿を価値付ける場面が何度かあるが、すべての段階で本時ねらっていることとの一貫性をもたなくてはならない。ねらいと評価がずれてしまうことで、本時付けていた力がぼやけてしまい、効果的な指導とならないことがある。また、欲張ることで多くのことを求めてしまうこともある。

ねらいと評価に一貫性をもたせる指導することで児童にとって分かりやすい授業を展開することができ、力を付けていくことになるだろう。

音楽科の評価における授業改善

~ねらいと評価が一体となった自己評価の在り方について~

平和中学校 音楽科 村田 智

1 授業改善の視点

授業振り返り表より

・学習のまとめ 自己評価

2 具体的な実践

- (1) ねらいと本時に何ができればよいかを明確にする。

【3年生の実践】

A・**B**の表現にこだわって歌おう

こだわるとは?

①強弱記号

②歌い方（発声、発音、タイミング）

本時できればよいことは、今まであまり気を付けていなかった強弱記号通りに歌うこと、この歌を貫く自然描写を表現する発声や発音で歌うことである。漠然としていた「こだわって」の部分を、生徒との対話の中で2つに絞ることで一人一人またはパートとして、何をすればよいかを明確にした。

(2) 評価の書き方

ねらいを達成したかどうかが、自分でもはっきりと分かるように書き方を以下のように示した。

- a 課題の中で特に意識をして取り組んだことはなにか
- b 課題ができるようになるために、どんなことをしたか
- c 取り組んだことから生まれた次時への課題は何か

この3点を全て書くことはなかなか難しいが、一つないし二つでも書くことで、ただ歌えばよいと思っていた生徒が、課題を追究して表

現しようと取り組むことができるようになった。

a パターンの書き方

Bをやわらかく歌うと、
31に氣をつけた。「とても
ふつうで～」の部分は時は
に考へて歌うことができる。
Aのmfがさりげに「～んじょ
やさしくも深きところも氣をつけてい。

b パターンの書き方

今日は、サビの時で、「～か」の声、の前が
ひ～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～
でせように、しゃべるときのたまごは、
とつか、お腹にかかる小さいうたうのい
い風たとえいが、在、そして、口どうかうを
軽やかに美しい声、美声がさりげなく

c パターンの書き方

「よそよ」の風をペーツして、
f1はんたけい、**A**のようになじ
じうなうのが難しいけど、
その中間の音を想して、風の
ようにゆるやかにうたえました。
息がつかないので、そこは、かほん
の声を出しています。

3 実践を振り返って考えられること

今日の1時間は楽しくし
す。ごくあ、という間でレッスン
が終わると、口を大きく広げて
空氣をいはします。口を
出せました。小さな見習いと
がんばりました。最後の音
が整っています。

ねらいと評価を一体化することで力が付く。力が付けば、学習が楽しいと感じる。これからも継続していきたい。

児童の主体的な学習姿勢を生み出す指導の在り方

～単元出口の児童の具体的な姿を明確にした単元指導の構想手順と評価方法について～

南姫小学校 新宅武徳

1 授業改善の視点

(個別指導) 単元末における評価方法と、理解不十分な児童への指導の方法

2 具体的な実践

(1) 単元をつらぬく課題に帰結する単位時間のねらいの設定 (単元構想の手順)

① 単元入り口の児童の意識・考え方

- ・自分からだのことについて深く考えたことがない。
- ・自分からだの中はいったいどうなっているのか。

そこで、次のような単元の出口における児童の姿をイメージする。

② 単元出口の児童の意識

私からだには、生きていくためにこんなにすばらしいしくみやはたらきがあるんだ。

この出口に到達できるよう、『単元を貫く課題』を設定する。

③ 単元を貫く課題

私からだには、生きていくためにどのようなしくみがあるのだろう。

「呼吸」→「消化・吸収」→「血液循環」→「生命維持のためのしくみ」という視点で、人の体のしくみやはたらきについて追究できるように単元を構成する。各視点の学習をまとめる際、常に『単元を貫く課題』に帰結する。また、実感を伴った理解を促せるよう、可能な限り、下記のように「自分の体」について個別実験を主体とした追究活動を行う。そうすることにより、単元入り口で、あまり意識してみたことのなかった自分の体について、改めて理解を深め、単元出口の姿に迫ることができると考えた。

④ 自分の体についての追究活動の実際

第2時 自分の呼気に含まれる気体

(石灰水を用いた個別実験)

気体検知管による酸素の体積の割合を調査 (グループ実験)

第4時 だ液の働き (個別実験)

第6時 自分の脈拍や拍動の回数 (個別実験)

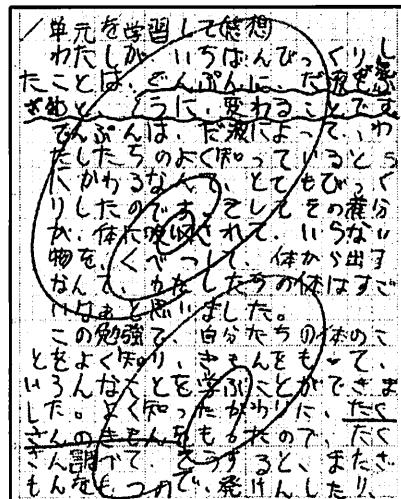
第8時 自分のからだで内臓の位置を示す。 (個別実習)

(2) 『単元のまとめ』の分析による単元末における評価と理解不十分な児童へ指導方法

単元末に、「この単元を通して学んだことや感じたこと」という内容でノートにまとめを書く時間を確保した(約15分)。

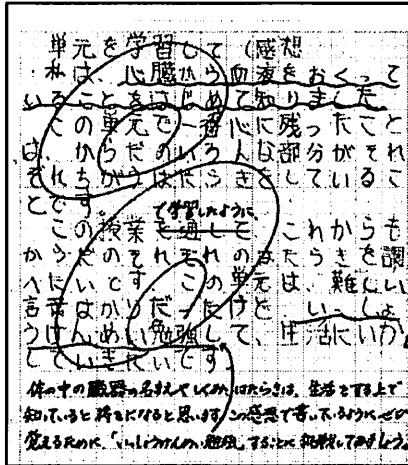
先述した「単元出口の児童の意識」に達成できているかどうかを、その内容分析により評価した。また、教師が単元当初にイメージした姿に達成が不十分であった場合、朱書きにより、単元で学習した内容について考える視点を与えるようにした。

A 達成できていると評価する内容



半数以上の児童が、自分のからだについて改めて知ることができたことに対しても満足感を得ることができた。さらに、疑問を持つことができた児童に対しても、その解決方法についてアドバイスを朱書きするようにした。

B 達成が不十分であると評価する内容



心臓など様々な臓器のはたらきについて学習できたようだが、自分の体という意識が弱かつた。そこで、心臓が血液を送っているようですが、自分の体で実感してみるよう、朱書きで伝えられた。後日個別指導で実感できたか児童に確認をした。

3 実践を振り返って考えられること

単元を貫く課題の設定やその視点での評価を意識的に行うことで、教師は、各単位時間で『自分に備わった、体のしくみやそれはたらきのすばらしさ』という一貫した姿勢で指導にあたることができた。そして、児童に、「自分の体をもっと調べてみたい」という主体的な姿を生み出すことができた。